

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

青空と白銀の世界

3月3日、卒業式の翌日である。生徒9人（男子6、女子3）、顧問4人（うち一人は外部コーチ）という布陣で、白馬乗鞍へ行って来た。2日前に新雪が降り、山は美しい衣をまとっていた。7時に学校集合。顧問の4台の車に分乗して拇池スキー場へ。土曜日とあって、混雑している駐車場を予想していたが、ラッキーなことにちょうど4台分まだ第1駐車場に余裕があった。

今はゴンドラ代を買うのにも登山届を出すことが求められる。もちろん僕は県にWEB申請してあるので、何の問題もないが……。駐車場が空いていることからわかるように、ゲレンデはすきずきしている。20分で拇の森駅へ。天狗原と白馬乗鞍が青空の下に白く輝いている。鷲峰の稜線からは、沢沿いに雪崩が毎年発生していることや、時間と天候などを勘案して、臨機応変に今日の行動をすることなど、生徒と注意点を確認して9:45に出発。外部コーチのM氏と顧問のN氏は成城小屋での合流をするということで、ロープウェイで自然園まで移動。残る顧問のK女史と私は生徒6人とともに歩いて登る。

拇の森ゲレンデは去年まではスノーボードのジャンプ台やハーフパイプがあったが、今年はそれもない上に、リフトも動いていない。拇池では一番雪の良いゲレンデだが、土曜日なのに今日は静かだ。シュプールもついておらず、人もいないゲレンデを林道に向けて登りあげた。生徒のうち2名は山スキー。事前にセキュラフィックス（ゲレンデスキーのビンディングにはめて登るときにかかるとが浮くようにする道具）を渡して調整してくるように言ってあったのだが、緩かったのか何度かビスを締めなおす。

早稲田小屋、大経大小屋を横目にみながらおよそ1時間強で成城小屋に到着。ロープウェイ組と合流。目指す天狗原の稜線は指呼の間である。山スキー、わかん、スノーシューそれぞれに一長一短ある中で、パーティとして一体の行動をする。今日の雪はほど



ほどに堅く締まっていて歩きやすい。高度を上げるにしたがって後立山の峰々が大きく迫力ある姿で迫ってきた。思わず声をあげる生徒たち。とりわけ初めて本格的な雪山を体験する1年生の生徒たちは感動している。森林限界を越え、天狗原が近づくにつれ、風が強くなってきた。天狗原に到着したのはちょうど12時。時折ものすごい突風が吹いてくる。目指す白馬乗鞍の大斜面には何人かがと

りついていたが、風と時間を考慮して、我々の今日の行動はここまでで打ち切ることにした。軽く行動食を食べ、記念写真を撮って、成城小屋まで下って大休止をすることにした。

今日の雪は最高だった。歩き組が涎を垂らして眺めているのを横目に大滑降を楽しん



だ。あれだけ苦勞して登ったのに、下りはあっという間。しかし、スキー組の生徒二人も大満足だった。成城小屋まで下りれば、風もなく穏やかな天候に戻った。陽だまりでは、男子チームはラーメンを作って食べる。女子はその間にアンパンマンを作ってご満悦。ゆったりとした時間を過ごしたのち、最後は恒例の山岳部歌を歌って締めた。

雪山登山は、時と場所を選びさえすれば、こんなに楽しいことはない。またこんなに美しい世界はない。しかし、ひとたび対応を間違えると大変なことになる。世間ではその大変なことの方のみが刷り込まれていて、冬山イコール危険という呪縛から抜けられない。

生徒たちには安全登山を続ける中で、愉しさも危険もわかる自立した登山者になってほしいと強く願う。今回、前日に卒業したばかりの生徒も一人同行した。雪ダルマの写真の左端に移っているのが彼女だ。彼女を筆頭に今年卒業した3年生は、3年間山岳部に所属してよかったといって卒業していった。そして、みんな卒業後も山を続けたいと言ってくれている。統計をとったわけではないが、高校山岳部を経験した生徒のその後の山を続ける割合はそれほど高いものではない。



しかし、ここ数年の卒業生が比較的高い割合で山を続けてくれているのは嬉しい。彼らが自立した登山者として山の「愉しさ」と「厳しさ」をわかったうえで山を続けてくれるのならば、こんなにうれしいことはない。

山の素晴らしさに気づき始めた卒業生が無邪気に雪と戯れて雪ダルマをつくっている姿を見て、下級生もその大きく見える先輩の姿から多くのものを得てくれているのだろう。こうやって伝統が築かれて

いく。顧問の仕事は、安全なフィールドを用意して、そこへ連れ出すことだ。あとは、自然と先輩が生徒たちを導いてくれる。

編集子のひとりごと

毎年行っている白馬乗鞍での日帰り山行であるが、やはり今年は慎重になった。2日前に降った雪の状態がどうなのか、積雪が少ないことがどう影響するのか、万全の上にも万全の体制を整えて、実施した。幸い、雪は安定しており雪崩の可能性はまずないだろうという確信をもって山に入ることができた。結果、生徒たちはまた一回り大きく、たくましくなって帰ってくることができた。よかった、よかった。(大西 記)